

4. 美術館との連携

美術館には、感動をもたらすものがたくさんあり、知的発見や驚き・感動といった感性と知とをいっぱい刺激する「実物情報」がある。^{*24}美術館と連携した鑑賞学習の推進気運が高まってきていることを先に述べた。我が国における美術館教育の発展をふり返ってみると、欧米の美術館教育に触発されて1990年代に急速に発展してきた。各地の美術館において、ワークシート、セルフガイドなどの開発が進み、ギャラリートークや教育普及活動としてのワークショップや講演会なども充実してきた。本県でも、美術館での鑑賞の条件が向上してきたので、できればもっと活用したい。

美術館に出かけることのよさは、本物に触れられることがまず思い浮かぶ。そこで、本物に触れることのよさを考える意味で、本物に接しないと分かりかねることとしては、次のようなことがある。

○立体作品やある種の現代アートの作品

図版やDVDなどの映像資料は、技術開発によりかつて考えられなかったほどに、画質が向上してきている。それでも、平面的である画像は四方から見る彫刻や立体作品、インスタレーションなどは十分にカバーしきれない。記録媒体の改良により動画も優れた画質で手頃に入手可能となり、動く作品など時間の変化の変化を伴う作品も別の場所で鑑賞できるようになった。しかし、近いところでは「横浜トリエンナーレ 2005」に見られるように、現代アートには現場に臨まない限り鑑賞できないものもある。そもそも“アートサーカス [日常からの跳躍]”と銘打ったこの展覧会は、静的な美術鑑賞の場としての展覧会ではなく、作品も時間の経過やコミュニティとの関わりから刻々と変化し、動き続ける展覧会を目指したものであった。

○色彩やテクスチャー

本物を見たら、色の感じが違っていたということは少なくないだろう。筆者が初めてピカソの油彩画を見たときの驚きは、30年以上経過した今でも鮮烈に残っている。また、山口県出身の香月泰男は、シベリヤシリーズで知られる。香月の絵は、写真やテレビの画面でいくら見てもそのよさが伝わらないといわれる。^{*25}シベリヤへの思いが塗り込められた特徴ある色彩と肌合い、そのリアリティは、オリジナルにふれないと分からない。

○スケール感（大きさ・小ささ）

色彩と同様に、大きさも数字で寸法を知っているだけでは、実感が湧きかねる。報道などでは、身近にあって大きさをイメージしやすいものとの比較で説明されることが多い。2005年末に兵庫県立美術館で開催された「アムステルダム国立美術館展」は、本物はわずか30点ほどにすぎないといわれるヨハネス・フェルメールの『恋文』が出展されて話題を集めた。充実した描写なのだが、実際の大きさは44×38.5cmと意外と小さい。反対にピカソの『ゲルニカ』は大作である。授業で扱う場合には同じサイズに紙をつなぎ合わせてみせるなど、各学校で工夫が凝らされている。

*24 遠藤友麗、「学習指導要領で鑑賞を重視したこと」、『教育美術』財団法人教育美術振興会、2005年7月号、p.29

*25 立花隆、『シベリヤ鎮魂歌—香月泰男の世界』、文藝春秋、2004、

個人の感覚に関わることでもあり、筆者の体験を基に3点だけ述べた。だが、美術館の作品が本物であることが、美術学習の場合は必ずしも最上の条件とはならない。美術館では、さわれないなど本物であるが故の制約も少なくない。徳島県にある大塚国際美術館は、本物でなく実物大の陶板作品による美術館なので、常時世界の名画が鑑賞できる。本物効果を越えたところでの美術館の魅力づくりとして、様々に試みられているのが今日の状況である。

本県においても、美術館や博物館等の建設・整備・充実が続いてきている。景観のよさが全国的に知られるようになったものや、魅力的な展示・企画展などもあり、教育普及活動も積極的に実施されるようになってきている。とりわけ近年は、地域と密着した運営や美術教育関係者への働きかけなどが進み、地域との関わりを深めつつあるように見える。

本物との出会いが美術館の切り札ではないことを記したが、多数の美術館・博物館等があり、交通の便に恵まれた都会地に比べると、本県では本物に触れられる機会は格段に少ない。それだけに、条件が整って美術館等へ出かけることができる場合には、これを逃さないことと学習成果を高めることが大切になる。そこで、子どもたちはガヤガヤと通り過ぎるだけ、美術館側はハラハラと見守るだけとならないように、学校が引率して美術館で鑑賞を行う場合には、次のような点に留意したい。^{*26}

- ・学芸員との連携を図り、事前打ち合わせを大切にする。
- ・事前学習を実施して、授業のねらい、鑑賞のポイント、鑑賞マナーなどを理解させておく。
- ・本物を鑑賞するには「見る」ことに重点をおく。
- ・自分の見方や感じ方を大切にさせる。

(1) 美術館の鑑賞学習 (小学校全学年、中学校第2学年)

2005 年秋、益田市に島根県芸術文化センター(グラントワ)：県立石見美術館が開館した。『北斎展』の開催に合わせて鑑賞に訪れた小学校の低・中・高学年のそれぞれのグループ及び中学校第2学年のグループに同行する機会を得た。観察や学芸員からの聞き取りで分かったことなどを記す。

- ・大人は有名作品や説明文を注目する(名札で作品を同定し、安心するといった態度)が、子どもは気に入った作品を集中して見る。
- ・大人は企画展を注目しがちだが、子どもは常設展でも鑑賞態度に大差はない。
- ・子どもは童画のような可愛らしさを好むと思いがちだが、実は気味悪いものや不思議な作品に関心を示す。^{*27}
- ・肉筆画の鮮やかな色彩は、低学年をも引きつける。(本物の魅力)
- ・子どもたちは予想した以上にじっくり作品を見る。
- ・小学生は学芸員の問いかけに活発に反応し、多様な意見を述べる。

*26 「学校+美術館からの発信」、前掲書、『美術鑑賞宣言』、p.260-

*27 アメリア・アレナスは、世界各国でのギャラリー・トークの経験から、子どもが好む作品の傾向について、同様な指摘をしている。

- ・ワークシートなしでは、ほとんどメモしない。(事前の指示は不明)
- ・この中学校では、第2学年国語科で赤瀬川原平『神奈川沖浪裏』(出典「名画読本 日本画編」) を学習するので、鑑賞学習への参加学年になった。



グループで鑑賞して回る



学芸員による解説

<日程の概略>

今回は、施設のオープンに伴う事業としての参加であり、施設が準備したプログラムで行う。学校側の関わり方は、引率業務の域を出ない。

○貸し切りバスで到着。…教育委員会が費用負担

○研修室にて学芸員から事前レクチャーを受ける。

- ・島根県芸術文化センター(グラントワ)、県立石見美術館の紹介
- ・北斎の略歴、浮世絵版画の作成法などの説明
- ・版木の実物を手にとって見せてもらう
- ・鑑賞のマナー…筆記用具は鉛筆に限る。展示物にさわらない。

○展示室にて鑑賞する。

- ・『北斎展』の減免チケット受け取り…コレクション展：小中高生無料

企画展：申請すると減免規程により観覧料免

除扱い可能

- ・要所では学芸員の説明や問いかけ
- ・展示室内を自由に鑑賞

○グラントワの館内見学ツアー。

(2)美術館のワークショップ「謎なぞ美術館へようこそ」(第1・2学年;鑑賞)…事例10 「ぺたぺたアート」(;造形遊び)…事例11

浜田市世界こども美術館では、市内小学校を対象にして、展覧会鑑賞とその内容に関連した表現のワークショップを行っている。

この事例は、小学校1年生9名、2年生10名の小規模学級のものである。2年生は、1年の時に1回美術館に出かけて鑑賞と表現活動のワークショップを経験している。企画展『謎なぞ美術館』の開催に合わせて計画された。この展覧会は、「一見すると折りたたんだ新聞紙だが、よくよく観察すると実は陶器でできている。」「遠目には女性の写真だ

が、近づいてみると足跡が並んでいる。」といった不思議な作品ばかりが集められていた。

午前中は、1時間ほどかけて作品を鑑賞する。鑑賞では、学芸員がリードし、説明を加えながら作品を見ていく。教師は、児童と一緒に学芸員の話聞きながら、気になる児童を個別的に支援する役割を務める。午後の表現活動では、展示作品にあった足跡をつける活動を取り入れて、長靴や手作りのオリジナルサンダルによって足跡を付けていく。大きな布いっばいに足跡を付けていく、体全体を使う活動である。ここでも、全体への指示を出して活動をリードするのは学芸員の役割で、教師は活動が停滞気味の児童に声をかけたり、相談にのったり、手助けしたりなどサブに回った。これらの役割分担等については、事前に話し合いがもたれている。事前に児童の実態や学習のねらい、美術館のねらいなどを話し合い、当日の流れや支援の方法を共通理解して臨んでいる。

後日、『岡本太郎とピカソ展』に合わせて再び鑑賞と表現活動を実施した。

教師は前回にも増して綿密な事前打ち合わせをし、自身がじっくり作品鑑賞をしてから臨んだ。役割分担については、学芸員が全体指導と作品について特徴的な話をする。教師は、一人一人の様子をよく見て意欲を高めるよう声掛けなどの支援をする。

何れの機会においても、教師は個人別に評価規準にそった評価と簡単なメモ、行った支援が記入できる「鑑賞評価カード」をもって評価活動を行った。「十分満足できる（A）」「努力を要する（C）」は、記号を記入し、様子を記述する。「おおむね満足できる（B）」は、特記事項がない限り何も記入しない。（C）の場合には、支援内容を書く。教師がサブに回れる時は、児童の学習の様子をしっかり見とることができる好機でもある。この教師は、C評価の児童を中心に記録したり、支援したりすることを試みて、効果的にできたと報告している。さらに、見落としがないようにビデオ撮影も行った。ビデオによって、現場では気付かなかった児童の動きを見つけることができ大変参考になったとも報告している。事前の打ち合わせと鑑賞を十分に済ませておくことで、このような教師の動きが可能になったのであり、欠かすことはできない。

また別の学校の場合には、折良く出品作家自身によるワークショップが行われていた。このような機会に恵まれた子どもたちには、本当に印象的な学習になる。

ここに示すのは、『岡本太郎とピカソ展』に合わせたワークショップにおける中学生の様子である。



(3) 学校外の人材・施設との連携

本県では、地域の自然、歴史、文化等の教育資源を活用し、市町村が学校・地域等と連携して、主体的に取り組むふるさと教育活動が展開されている。この動きもあり、このところ地域との連携・融合を図った授業が増えつつある。平成17年度県教育研究大会中学校美術分科会において、「校外人材・施設等の授業での活用のついて」の提案発表がなされた。これは、「美術教員の配置が減少していく現状下で、授業の充実、広がりのため、校外の教育力を有効に活用するための手立て」との課題意識に基づいて研究されたものである。この発表では、美術館スタッフの意見を授業展開に生かしたり、作品鑑賞に対する美術館からの発信を受けたりすることによって、美術に対する様々な角度からの考え方を身に付けることができるとしている。成果と共に問題点も報告されているので、以下に列記する。

(ア)外部講師と授業者の意識のズレやトラブルを防ぐために、事前に目的や意向を伝える必要がある。

(イ)地元の人材がなかなか確保できない。熱意があり、子どもに対し臨機応変な対応ができる人材が求められる。

(ウ)授業時間の確保と外部施設との連絡調整の難しさ。事務的な手間がかかる。

(エ)講師確保のための財政的な問題。交通費のみでお願いしている場合も少なくはない。

(オ)講師によっては対応できる人数に差があり、事前の打ち合わせが必要。

(カ)個人情報・守秘義務に関する、配慮できる情報をどの程度共有できるかが問題。

(キ)どのようにカリキュラムの中に組んでいくのか。短教材として取扱い印象深い授業を実施するのか、平素の授業と関連付けた活動がよいのか、今後の取り組みの課題である。

これらの課題を解決しながら連携を深めて行かねばならない。従来の連携のあり方の反省として、外部との連携にあたっては、最低次の二点は留意すべきと考える。まず、一方的に求めないこと。学校外からの要望と学校からの要望のすれ違いが、これまで連携が進展しかねてきた原因の一つであるとみる。両者の思いやメリットをすり合わせながら、連携から融合へ進めていくことが求められている。そうでない限り、財政的な支援があるとき限りのことに止まらざるを得ないであろう。

次に、丸投げにしないこと。教師の専門性を棚上げした丸投げの外部依存は、この教科の存在基盤を揺るがし、更なる崖っぷちに追いやることになりかねない。

事前準備の煩わしさを理由に外部の教育資源を有効に生かすことに消極的であってはならない。

(4)美術館における教師・作家・美術館職員の授業「現代アート鑑賞のはじまり」

…事例12

(第2学年美術科

;鑑賞)

この授業は、2005年全国造形教育研究大会の公開授業の一つとして、横浜美術館で行われた。現在最も人気が高い作家の一人である奈良美智の授業である。この場に臨んだ筆者の記録から、奈良の言葉を中心に概略を記す。

授業者：ワークシートを配布し、本時の目的について説明する。…本時の目的の理解

職員：最低限のマナー守ること。現代美術について。 …鑑賞マナーの再確認
自分の見方で絵を楽しむことができるということを教えてくれるはず。

奈良：●今日の授業

この絵はどうか、この作家はこう考
えていると かの解説ではなく、自分で考
えてきた授業をしたい。

●作品の題名

作品の題名は作者にとっては意味があ
るだろうが 見る側はそう大切に思わなく
ても良いのかもしれない。単純に見てど
う思うかだけ。「すごいなあ、何 ですよ

いんだろう。」と考えれば良い。すごいだけ ではなく、何でこんな悲しい顔が描け
るだろうでも良 しい。 みんなが思っている気持ちの分だけある。 授業者 職
員 奈良美智



幼稚園生とは違い、成長すると育った分だけ淋しさや楽しさが広がる。

●課題のワークシート …事例12-2

どの作品もそれぞれに一つはおもしろさがあるはず。四コマ漫画みたいに、
四つのコマ 分の作品を選んで、マスに描く。全部でなく部分だけ描いても良い。
模写するように一生 懸命でなくても、どの作品か分かれば良い。

大切なのは、文章を書くところ。四つの作品を選んで、それを組み合わせて、
自分の中 での物語を作ってほしい。一つなら簡単、もともと作品でその中で色
々語っている物語が ある。二つ三つとなると、難しいかもしれない。話が絵か
ら離れているほどおもしろいと 思う。

●考えた物語

①朝起きたら、周りは真っ暗。誰もいなくて不安だった。②歩いてみると、
高速道路が あって、…。(奈良が作った物語の例)

みんなの想像で話を膨らまして。本でも、次が分からないから読み進む、想
像通りに行 かないからおもしろい。思ってもいなかったけど、感動したとか…。

●課題の確認

選んだ作者名は書いておこう。題名をあまり深く考えなくて良い、見ること
については 自分の方が良いのだから。描きながら1～4の順序は替えても良い。
まず、ぐるっと回っ てどの絵にするか選ぶ。最初の絵を決めてから後を選んで
も、話を作ってから話に合う絵 を選んでも良い。ぱっと目立つことでなくても、
人が気付かないことでも、こうなるだろ うなど分かるような話じゃなくて。探
しているうちに、絵とかしっかり見ているといろん な発見があるかもしれない
から、いろんなことが見えてくることを期待している。

授業者：30分ぐらいで、この大きな四つの部屋の中で選ぶ。

私と奈良さんとは適当に歩いているから、アドバイスがほしいときは声をかけて。
終わりには声をかけるから集まってほしい。

(終末、生徒4人分の物語の紹介を終えて)

奈良：この授業で自分が何をやってほしかったかという、ただ見ているだけでなく、絵の中から何が見えるか自分が何を感じようとしていくか探してほしかった。実は、文章ができなくても、絵もできてなくてもOK。

一番大切なことは、まず見る。普段見逃していることが、いろんな想像力で見えたかもしれない。一つの絵からいろいろ探してほしかった。絵は題名に惑わされず、自分の発想の基準でいろいろ考えながら見ること。ビデオとかでも、題名にだまされることある奈良作品の前ででしょう。

授業者：他の作品も自由に鑑賞しよう。(略：隣の展示室で開催中の『李禹煥展』の見方について)

普段はビデオとかの奈良さんが、ここに実在しているかどうか握手してもらいましょう。

奈良は、題名に惑わされず、自分の見方でしっかり作品を見ることを繰り返し語りかけた。実は、四コマ全てを描き、文章を完成できた生徒は数名にすぎなかった。しかし、課題を完成させることがねらいではなく、それは想像を働かせながら絵の細部までしっかり見させるための手立てであった。最後に握手を交わしながら分かれた奈良との授業は、生徒たちにかげがえのないものとなったであろう。

